

INFORMATION *Circular*

JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

■第51回(平成6年度第1回)運営委員会	1
■1993年度収支決算(案)	3
■1994年度予算(案)	4
■第5回加藤淑裕記念賞候補者募集要項	5
公益信託・成茂動物科学振興基金	6
■日本学術会議だより	7
■国際細胞分化学会, 第8回国際会議	11
■会員異動	12
■賛助会員	21
■賛助会員へのご入会のお願い	22
■広告掲載のお願い	23

NO. 77

April 1994

日本発生生物学会

〒444 岡崎市明大寺町字西郷中 3 8

基礎生物学研究所 生殖研究部門

会 長：〒 444 愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38
基礎生物学研究所 発生生物学研究系 形態形成研究部門
江口吾朗（電話 0564-55-7570）

D G D 編集主幹：〒 227 横浜市緑区長津田町4259
東京工業大学生命理工学部
星 元紀（電話 045-924-5720）

D G D 編集幹事：〒 724 東広島市鏡山 1 - 3 - 1
広島大学理学部遺伝子科学
嶋田 拓（電話 0824-24-7446）

事 務 局：〒 444 愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38
基礎生物学研究所 発生生物学研究系 生殖研究部門内
（幹事長） 長濱嘉孝（電話 0564-55-7550）
（庶務幹事） 田中 実（電話 0564-55-7552）
（会計幹事） 吉国通庸（電話 0564-55-7551）

学会センター：〒 113 東京都文京区本駒込 5 - 16 - 9
学会センター C21
財団法人 学会事務センター
日本発生生物学会担当係（電話 03-5814-5810）

日本発生生物学会への入退会，住所・所属変更，会費納入，および出版物（D G D，イン
フォメーション・サーキュラーなど）の郵送については，上記の日本学会事務センターに書
面でお問い合わせ下さい。

第51回（平成6年度第1回）運営委員会

第51回運営委員会は、1994年1月7日午後1時より、基礎生物学研究所1階111号室で開催された。

出席者(敬称略)：江口吾朗(会長)，長濱嘉孝(兼幹事長)，星元紀(兼編集主幹)，浅島誠，安部眞一，井出宏之，岡田益吉，片桐千明，佐藤矩行，塩川光一郎，中辻憲夫，藤沢肇，八杉貞雄，安増郁夫(以上運営委員)，嶋田拓(編集幹事)，田中実(庶務幹事)，吉国通庸(会計幹事)

1. 会長挨拶

2. 新事務局幹事紹介

3. 報告事項

- 1) 会員数の推移：1994年1月1日現在の会員数は1018名で、前年度同時期に比べて54名の増加がみられた。内訳は、正会員824名，学生会員173名，賛助会員21名。この一年間での入会者90名，退会者36名。

- 2) Circular 76号が印刷中で，1月半ばに発刊予定。77号は5月半ばに発刊予定。

- 3) 平成5年度公益信託・成茂動物科学振興基金研究助成金

平本幸男委員長から上記研究助成金（各60万円）が以下の8名（敬称略）に決定した旨の連絡があった。

雨宮昭南(東京大学)，幸島司郎(東京工業大学)，小島茂明(東京大学)，代谷陽子(和洋女子大学)，土屋楨三(神戸大学)，沼田英治(大阪市立大学)，峰雪芳宣(広島大学)，柳明(石巻専修大学)。

なお，平成6年度分は，現在公募中（別掲）。

- 4) DGD編集

本学会誌DGDの編集主幹が，1993年12月に片桐千明氏（北海道大学）から星元紀氏（東京工業大学）に引き継がれたとの報告があり，新旧両編集主幹から新任，退任の挨拶があった後，江口会長から両氏に対し感謝の言葉が述べられた。また，片桐編集主幹からDGDの編集状況について（採択率，6～7割：採択から発行までの期間，1～5ヶ月）の説明があった。

星新編集主幹から，DGDのAssociate Editors, Managing Editor, Editorial Board, Advisory Boardのメンバー候補者についての提案があり，意見交換を行った。最終的には，これらの意見を参考にして星編集主幹が決定することとした。

- 5) 日本学術会議

江口会長（動物研連委員）より，1993年6月5日及び10月29日に開催された上記会議（改組，科研費の審査方法について，用語集の作成，動物関係資料の整理法，理学系実験動物飼育施設）についての報告がなされた。

6) 1994年度大会

井出宏之氏(大会委員長)より、5月25~27日に仙台市民会館で開催される第27回日本発生生物学会の準備状況の説明があった。また、同大会中に開催されるシンポジウムの準備を藤沢肇氏に依頼する旨の報告があった。

7) 次年度大会

1995年度(第28回)の大会を、名古屋地区で開催することが確認された。

4. 審議事項

1) 1993年度収支決算案が提出され、審議の結果承認された(別掲)。

2) 1994年度予算案が提出され、審議の結果承認された(別掲)。

3) 日本学術会議会員候補者および選挙人の選出

会員候補者として江口吾朗氏(基礎生物学研究所)、推薦人として安増郁夫氏(早稲田大学)、推薦予備人として岡田益吉氏(筑波大学)が選出された。

4) 会計監査委員の選出

上記委員に岩松鷹司氏(愛知教育大学)および井出宏之氏(東北大学)が選出された。

5) 選挙管理委員の選出

上記委員に藤沢肇氏(名古屋大学)、黒岩厚氏(名古屋大学)が選出された。

5. その他

1) DGDの刊行について

DGDの刊行のあり方については、数年前より会長が会員にアンケートで意見を求めたのをはじめとして、運営委員会等でたびたび協議を重ねてきた。さらに、本運営委員会でも引き続きこの点に関して話し合いがもたれた。その結果、本誌の質の向上には、学会自らがこれまでと同様編集責任を保持しつつ、出版に関わる諸々の業務に関しては適当な出版社にゆだねることが良策であるとの結論に達した。一方、1993年度収支決算および1994年度予算案で示されたように、DGDの出版のための経費が学会費収入の1.5倍を越えることは、文部省から相当額の補助があるとはいえ、学会運営の上で財政的にきわめて不健全な状態にあり、この点でも改善の必要性が指摘された。今後さらに、これらの問題について、会長、事務局、編集幹事などで引き続き検討するとともに、次回の運営委員会および総会で審議することとなった。

—電話、Fax 番号変更のお知らせ—

学会誌 Development, Growth and Differentiation(DGD)の編集主幹・星元紀先生の電話とFax 番号が下記のように変更になりました。DGDに関する投稿、問い合わせ、忌憚のないご意見などは下記にご連絡下さい。

DGD編集主幹 星 元紀

〒227 神奈川県横浜市緑区長津田町4259

東京工業大学理工学部生命理学科

電話: 045-924-5720

Fax: 045-924-5777

E-Mail: dgdhoshi @ nc. titech. ac. jp

1993年度収支決算（案）

<一般会計>

収 入		支 出	
学会費	9,829,449	D G D印刷費	12,796,720
D G D売上げ	3,640,900	D G D編集費	2,100,000
英文校閲料	250,000	英文校閲費	500,000
バックナンバー	36,000	学会事務センター	
超過ページ代	960,000	業務委託費	1,306,004
文部省助成金	5,260,000	発送費	1,159,434
広告代	506,000	諸経費	71,500
賛助会費	440,000	D G D保管費	124,800
雑収入	31,132	大学印刷	
利息	26,313	発送費(含国内外分)	917,199
		表紙代	198,275
		サーキュラー印刷費	830,695
		要旨集印刷費	750,000
		大会援助費	250,000
		運営委員会経費	323,350
特別会計より借入	600,000	事務局経費	177,380
		手数料	1,919
		国際発生生物学会へ	37,500
小 計	21,579,794	小 計	21,544,776
前受会費	158,000	前受会費	158,000
前年度繰越金	78,745	次年度繰越金	113,763
合 計	21,816,539	合 計	21,816,539

<特別会計>

収 入		支 出	
前年度繰越金	1,790,651	一般会計に貸出	600,000
D G D基金	137,390	次年度繰越金	2,251,149
第26回大会より	711,318		
テレホンカード売上げ	211,790		
テレホンカード在庫分	75,210	テレホンカード在庫分	75,210
合 計	2,926,359	合 計	2,926,359

1994年度予算（案）

<一般会計>

収 入		支 出	
学会費	10,000,000	D G D印刷費	13,000,000
D G D売上げ	3,700,000	D G D編集費	2,100,000
英文校閲料	250,000	英文校閲費	500,000
バックナンバー	100,000	学会事務センター	
超過ページ代	900,000	業務委託費	1,500,000
D G D別刷り代	600,000	発送費	1,400,000
文部省助成金	5,260,000	諸経費	100,000
広告代	90,000	D G D保管料	150,000
賛助会費	330,000	大学印刷	
雑収入	30,000	発送費(含国内外分)	1,200,000
利息	30,000	表紙代	150,000
		サーキュラー印刷費	850,000
特別会計より借入*	1,900,000	要旨集印刷費	800,000
		大会援助費	250,000
		運営委員会経費	400,000
		事務局経費	200,000
		選挙費用	600,000
		国際発生生物学会へ	37,500
小 計	23,190,000	小 計	23,237,500
前受会費	158,000	前受会費	158,000
前年度繰越金	113,763	次年度繰越金	66,263
合 計	23,461,763	合 計	23,461,763

<特別会計>

収 入		支 出	
D G D基金	500,000	一般会計に貸出し	1,900,000
前年度繰越金	2,251,149	次年度繰越金	851,149
テレホンカード在庫分	75,210	テレホンカード在庫分	75,210
合 計	2,826,359	合 計	2,826,359

* 郵便料金の値上がりによる発送費等の増額により、今年度も特別会計から190万円の借り入れが必要となる。これにより特別会計の残額がわずかとなり、1995年度以降の学会運営がきわめて困難な状況となる。

お知らせ

第5回 加藤淑裕記念賞候補者募集要項

1. 趣 旨：

永年日本における発生生物学の発展に尽くし、1988年に逝去された加藤淑裕博士を記念するために設けられた賞であり、発生生物学の分野において優れた独創的研究を行なっている35歳以下の研究者（応募締切日における年齢とする）に対して加藤淑裕記念賞を贈呈するものである。候補者の国籍は問わないが、日本国籍以外の場合は日本での研究の経験があるか、または日本人と共同研究をした研究者を賞の対象とする。

2. 褒 賞 金：

受賞者に賞状ならびに副賞（総額50万円）を贈呈する。受賞件数は2件以内とし、複数の時は賞金を受賞件数で除した額を副賞として受賞者に贈呈する。

3. 応募方法：

応募は所定の用紙に必要事項を記入し、コピー3部および関連研究業績別刷各1部を添え加藤淑裕記念事業団に提出する。

4. 応募締切日：

1994年9月30日とする。

5. 選考の方法：

選考委員会（岡田節人委員長）において選考する。

6. 選考結果および賞の贈呈：

1994年11月15日までに受賞者宛に通知する。

〔連絡および送付先〕

三菱化成生命科学研究所内

加藤淑裕記念事業団

〒194 町田市南大谷11

Tel.(0427)24-6244

なお、第4回加藤淑裕記念賞は、岡崎国立共同研究機構生理学研究所高次神経機構研究部門 八木健氏「発生工学による哺乳類神経発生と機能の解析」に贈られることに決定いたしました。日本発生生物学会および大会準備委員会のご協力の下に、八木氏には本年5月の第27回大会において記念講演をお願いする予定です。

公益信託・成茂動物科学振興基金

平成6年度研究助成

1. 助成の対象 基礎的な動物科学の研究
2. 助成の内容 上記研究に対し、助成金を交付する。
助成金額：約300万円
助成金は、備品、消耗品、謝金、国内旅費などのほか、国外旅費にも使うことができる。
3. 応募の方法 所定の研究助成申請書用紙に必要事項を記入して、当公益信託事務局に直接申し込む。
申込〆切：平成6年7月末日必着。

公益信託・成茂動物科学研究助成基金事務局

〒100 東京都千代田区丸の内1-4-5

三菱信託銀行本店営業部公益信託課

担当 水津・小林

アジア学術会議～科学者フォーラム～ 開催

平成 5 年 12 月 日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは、10月20日から22日まで開催された第117回総会の概要、同総会で採択された「生物遺伝資源レポジトリー及び細胞・DNAレポジトリーの整備について（要望）」等、11月15日から18日まで開催されたアジア学術会議～科学者フォーラム～についてお知らせします。

日本学術会議第117回総会報告

日本学術会議第117回総会（第15期・第6回）が、10月20日～22日の3日間にわたって開催されました。

総会の初日（20日）の午前は、会長からの前回総会以降の経過報告に続いて、各部、各委員会等の報告（学術分野における国際貢献、アジア学術会議の開催など214件）が行われました。次いで、今回総会に提案される案件の「生物遺伝資源レポジトリー及び細胞・DNAレポジトリーの整備について（要望）」について、提案説明が行われた後、質疑応答が行われました。

午後からは、各部会が開催され、上記提案案件の審議及び各部会個別案件について審議が行われました。

総会2日目（21日）の午前は、同提案案件についての討論・採決が行われ、採択されました。これは、生物遺伝資源レポジトリー整備拡大の必要性の増大に対処するため、現在ある個別系統保存施設の拡充、総合調整機構の設置などを要望するとともに、細胞・DNAレポジトリーの整備のため、各省庁傘下の施設のネットワーク体制を構築し全体の活動を総合調整する、チェック機構を付加した細胞・DNAレポジトリーセンターの設置など、政府関係機関において取るべき具体的措置を要望するものです。

なお、本件を要望するに当たり会長談話が併せて発表されました。

同案件の採択に引き続き、昼休みを挟んで午後にかけて、現在、常置委員会及び特別委員会で審議されている懸案事項について、自由討議が行われました。この中で、「人の死と医療の在り方」を検討している死と医療特別委員会がまとめた「尊厳死」についての考え方を総会に報告し、それについて活発な議論が展開され、マスコミにも報道されました。

同委員会では、今回の議論を踏まえ、更に検討を深め、来年5月の総会に報告として提案するため準備を進めています。

総会3日目（22日）は、午前は、各常置委員会及び国際対応委員会、午後は各特別委員会がそれぞれ開催されました。

生物遺伝資源レポジトリー及び細胞・DNAレポジトリーの整備について（要望）

我が国の生物遺伝資源の保存は、数多くの施設・機関によって個別に行われているが、その充実・強化と、国のレベルでの生物遺伝資源レポジトリーの整備が急務となっ

てきている。他方、癌、遺伝病などの疾病の原因究明、ひいては人類の健康・福祉への貢献を目的とする細胞・DNAレポジトリーの充実・整備もまた、今日の我が国にとって急務である。

このため、互いに関連はするが、異なる性格、目的をもつこれら二つのレポジトリーの整備等について要望する。

1 生物遺伝資源レポジトリーの整備について

生物遺伝資源レポジトリーの整備拡大の必要性の増大に対処するため、政府関係機関において次の措置をとるよう要望する。

- (1) 生物遺伝資源の保存は、基本的には、従来どおり、その分野の担当研究者の能力、地域性などをいかして、個別の系統保存施設で行うことが望ましいので、そのより一層の拡充を図り、そこに専任の研究者、専門技術をもつ職員を置き、予算を充実し施設の近代化を図る。
- (2) 個別の系統保存施設では、遺伝子工学に基づくトランスジェニック生物、細胞融合によって作出される新種、DNAクローンや細胞及び凍結組織などを加えた新材料の保存を、社会的、法律的及び倫理的側面に配慮しつつ、積極的に推進する。
- (3) 系統保存事業の持続性を保障するため、国のレベルにおいて、研究施設を附置する生物遺伝資源保存センターを設立し、DNAクローンや細胞及び凍結組織のレポジトリーもこのセンターに集中する。
- (4) 生物遺伝資源保存センターは、関係機関との対応、保存系統に関する情報の収集・提供、系統の導入・配布・品質管理、海外との情報交換などについて、個別の系統保存施設の活動を総合調整する。
- (5) 国際的視野に立って、海外諸国との連携を深めるため、保存系統に関するデータベースを整備する。

2 細胞・DNAレポジトリーの整備について

細胞・DNAレポジトリーの重要性と必要性についての認識を新たにし、早急に次の対策を講ずることを、政府関係機関に要望する。

- (1) 現在、各省庁傘下の各研究機関及び大学・研究所の研究室に個別に置かれているレポジトリー又はそれに類する施設に対して予算、人員、スペース等について格段の措置を講ずるべきである。
- (2) それとともに、研究施設を附置した細胞・DNAレポジトリー・センターを新たに設置する。このセンターは、上記の諸施設の活動を総合調整する。

このセンターは、すべての施設と有機的に結合するネ

ットワーク体制を構築し、必要に応じて各研究室に分散保存されている細胞・DNAを受け入れる。また、現在設置されている施設のうち運営困難なものを解消し、このセンターに移管する。

- (3) 新しく設置されるセンターには十分な予算を措置し、自主的な運営ができるようにするとともに、このセンターの運営を支えるための専門職を育成・確保する十分な方策を講ずる。また、海外との協力関係のより一層の促進を図る。

さらに、センターの運営の適正を期するため、ヒトゲノムプロジェクトの推進についての勧告に言及されているようなチェック機構を付加する。

(詳細は、日本学術会議月報11月号を参照して下さい。)

生物遺伝資源レポジトリ及び細胞・DNAレポジトリの整備について(会長談話)

(平成5年10月21日)
日本学術会議
会長 近藤次郎

昨年6月、リオデジャネイロで開催された国連環境開発会議(UNCED)で合意された生物多様性保護条約を受けて、現在、世界中で生態系、生物種や遺伝子などの保存について関心が高まっている。これは本来、人間も含めて生命界全体の命運にかかわる重要な問題である。日本学術会議としても、今後さらに引続き審議を深めるべきであると考えている。

しかしながら、先進国を中心にしてこの種のプロジェクトは、国家の強力な援助の下に推進されている。将来におけるこの分野の科学の発展を考慮するとき、我が国の状況をこのままに放置すれば学問の進歩に遅れるなど由々しき事態になると憂慮するものである。

今回は「生命科学と社会的諸問題」特別委員会のまとめた提案について、総会で人文社会科学部門も含めて真剣な討議を行った上、とりあえずここに要望するものである。

アジア学術会議～科学者フォーラム～の開催について

- 1 日本学術会議は、アジア地域の各国科学者の代表を東京に招き、本年11月15日(月)から18日(木)までの4日間、三田共用会議所(東京都港区)においてアジア学術会議～科学者フォーラム～を開催しました。
- 2 このアジア学術会議～科学者フォーラム～は、地理的、歴史的、文化的に多くの共通点を持つ近隣諸国間の交流がそれぞれの国の学術の発展、ひいてはその地域全体の学術の発展にとって極めて重要であるとの認識から、アジア地域の各国における学術研究の現状について情報交換を行うとともに、アジア地域における学術研究分野での連携・協力の在り方などについて討議し、併せてアジア地域の学術研究者間の相互理解と信頼を深めることを目的として、本年度初めて開催したものです。
- 3 今回の会議には、中国、インド、インドネシア、日本、マレーシア、フィリピン、大韓民国、シンガポール、タイの9か国の学術推進機関(アカデミー等)から推薦された人文・社会科学系及び自然科学系の科学者19名が出席し(日本からは近藤次郎日本学術会議会長及び川田侃同副会長が出席)、「アジア地域における学術の発展とそのための連携・協力について」をメイン・テーマとして活発な討議を行いました。
- 4 初日の15日には、鳩山内閣官房副長官(内閣総理大臣あいさつ代読)を始め、国會議員、各国大使館、関係学術協会、関係省庁、関係団体などから200名を超える方々をお迎えし、開会式及び歓迎レセプションを開催しまし

た。

翌16日からの自由討議においては(17日は筑波研究学園都市視察(研究交流センター、電子技術総合研究所、農業生物資源研究所を訪問))、それぞれの国籍や専門分野を超えて、アジア地域における学術の振興という共通の目的の下、熱心な討議を行い、議長サマリーをまとめ、18日に無事閉会しました。

開催に当たり御支援・御協力いただきました方々に厚くお礼申し上げます。

(参考) アジア学術会議～科学者フォーラム～議長サマリー(仮訳)

- 1 アジア学術会議～科学者フォーラム～は、日本学術会議の主催により、アジア地域の9か国から、19人の各国の科学界を代表する科学者の参加を得て開催され、それぞれの国籍や専門分野を超えて、アジア地域における学術の振興という共通の目的の下、熱心な議論がなされた。本会合に参加した科学者は、学術の振興を通じた社会への貢献が重要であり、科学者の責務であるということを確認し、学術研究の成果は、人類の共通資産として、文化的、社会的、経済的發展を通じて、世界の平和と人類の福祉に貢献するものであると信じる。また、そのためには、自然科学者と人文・社会科学者の密接な協力も不可欠である。
- 2 本会合に出席した科学者は、アジアの科学者による学術協力についての初の会合を提案し、開催した日本学術会議に感謝し、今後も、このような日本学術会議の努力が続けられることを期待する。
- 3 今日、世界は、環境悪化、人口爆発、資源の枯渇など人類の英知を結集して取り組まねばならない深刻な問題に直面しており、本会合での討議は、そのような問題の解決に向けての将来の国際協力に発展していくものである。
- 4 持続的開発は、アジア地域の各国にとって、21世紀に向けての共通の重要課題である。地理的、歴史的、文化的に密接な関係を持つアジア地域の科学者は、この問題に協力して取り組むことが重要である。
- 5 国際的な研究、技術・資源の共有等に当たっては、地域的な協力が効果的である。今後、そのような領域において、地域の発展のために協力を推進することが必要である。
- 6 学術の発展、社会の発展の基盤となる人材の育成は、科学者が地域的に協力して取り組むべき課題である。次世紀に向けて、人材の育成のため、アジアの科学者も協力することが必要である。
- 7 各科学者及び各国は、研究者の交流、共同研究、シンポジウム、ワークショップ等による情報の交換を促進するよう努力することが必要である。
- 8 学術協力は、対等互惠の原則に基づいて行われねばならない。
- 9 本会合の趣旨、提案を受け継ぎ、より密接な学術交流・協力の基盤となる将来の会合が開かれることを期待する。
- 10 アジア地域の科学者によるこのような会合を毎年開催すること、当面、日本学術会議がその事務局となること、アジア地域の学術動向についてのニュースレターを定期的に発行することを提案する。

「日本学術会議だより」について御意見、お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(3403)6291

平成6年度予算(案)決定

平成6年3月 日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは、第16期の会員推薦関係費、アジア学術会議開催経費などを計上した平成6年度予算及び最近公表された「調査報告 我が国における学術団体の現状」等についてお知らせします。

平成6年度日本学術会議予算

平成6年度日本学術会議の予算額は、総額で12億128万7千円で閣議決定されました。前年度と比較して1億546万円の増。率にして9.6%の伸びです。これは、平成6年度が第16期の会員推薦期に当たり、会員の推薦に必要な経費、臨時総会及び臨時部会等の会員推薦関係費が8,048万1千円増額し1億5万5千円になったことが主な事由です。

また、アジア学術会議の開催に必要な経費が、前年度に引き続き2,219万5千円が認められました。

その他、平成6年度予算では、国際分担金の16団体に対する単位数の変更が認められ、国際会議の国内開催については、神経・筋、園芸学、錯体化学、心電学、情報ドキュメンテーション、病態生理学の6国際会議の開催を予定しています。

また、世界各地で開催される学術関係国際会議への代表派遣や二国間交流に必要な経費が計上されています。

平成6年度予算概算決定額表は、下表のとおりです。

(単位：千円)

事 項	前 年 度 予 算 額 A	平成6年度 予 算 額 B	比 較 増 △ 減 額 C = B - A	備 考
日本学術会議の運営に必要な経費	1,095,827	1,201,287	105,460	対前年度比較 109.6%
審 議 関 係 費	265,525	272,534	7,009	○地球圏－生物圏国際協同研究計画 (IGBP)シンポジウム、公開講演会等
国際学術交流関係費	221,254	226,646	5,392	
国際分担金	74,722	67,450	△ 7,272	
国内開催	73,543	86,172	12,629	
代表派遣	44,006	44,006	0	
二 国 間 交 流	6,823	6,823	0	○第16期推薦経費 ○臨時総会、臨時部会
アジア学術会議	22,160	22,195	35	
会員推薦関係費	19,574	100,055	80,481	
会員推薦管理会	19,102	21,632	2,643	
推薦経費	472	57,629	57,393	
臨時審議経費	0	21,007	21,007	
一般事務処理費	589,474	602,052	12,578	

第4 常置委員会報告—調査報告

我が国における学術団体の現状(要旨)

平成6年1月26日

学会協会等の学術団体は各専門分野の学術の進展において重要な役割を果たしており、加えて、日本学術会議の会員候補者を推薦し、また、研究連絡委員会に委員を送るなど、日本学術会議の基盤となっています。第4 常置委員会は、学術団体の活性化・活動強化等のための支援方策を検討するに当たって、学術全分野における学術団体の現状を知る必要を認め、調査を行いました。調査票は選択肢方式の9項目44設問にわたる詳細なものでありましたが、調査対象とした日本学術会議広報協力学術団体1069団体の70%にあたる750団体から回答を得ました。分析結果を対外報告「調査報告 我が国における学術団体の現状」として今回公表しました。

報告書は、(1)専門分野、(2)会員、(3)設置形態と組織形態、(4)活動状況、(5)国際性、(6)財政状態、(7)学術団体の属性にみる専門分野の類似性、(8)学術団体への支援について、及び「附属資料」よりなっています。報告では、学術団体の諸属性を、全団体平均に加えて、専門分野別と団体規模別に比較しています。63頁にわたる報告書の内容を簡潔に要約することは困難ですが、以下にその一端を紹介します。

学術団体の数は文学系及び医学系の分野で多く、法学系及び経済学系で少ない。2つ以上の専門分野にまたがる団体の割合は文学系及び医学系で少なく、理学及び工学で多い。平均正会員数は全団体平均で約2.5千人、人文科学部門で0.7～1千人、理学及び農学で1.7～2.5千人、工学及び医学系では約4千人である。

全団体の約20%が法人である。法人の割合は団体の規模の増大とともに急速に増加する。工学において特に高く、人文科学部門で低い。フルタイムに換算した事務職員数は正会員数に比例し、全団体平均でみれば正会員千人あたり0.71人である。事務所面積は正会員数に比例し、全団体についてみれば、基本面積が27㎡で、正会員千人あたり1.7㎡である。

会誌の発行は最も普遍的な活動で95%の団体に見られる。人文科学部門ではやや低く、理学及び工学においてやや高い。論文誌の発行は約27%の団体で行われており、経済学系、理学及び工学において割合が高い。書籍の出版は15%の団体で行われており、理学、工学及び農学で高い。その他の活動のうち、社会人教育は19%の団体で行われており、理学及び工学に多く、経済学系及び医学系で少ない。

国際集会を主催した経験をもつ団体は51%である。団体の規模が大きいほどその割合は高い。専門分野別で見れば、文学系及び法学系において低く、理学、工学及び農学で高い。国際集会を開催する上での困難の第1位は「経費の調達」で84%に達している。会誌あるいは論文誌を何らかの意味で国際的に開放しているのは85%の団体にみられる。

団体の財政規模を正会員数で割った額は全団体平均で29千円で、文学系及び経済学系において10～15千円、理学及び工学で高く48～57千円に達する。平成3年度における実質収支(繰り越しを除く)での赤字団体は全体の約3分の1であり、予算規模の10%以上の赤字をもつ団体が7%ある。外部からの支援を必要とする事業は、成果刊行が最大で60%、次が国際活動で30%である。団体の規模が大きくなると、国際活動への支援要求の割合が高まる。具体的な支援方策としては、学術団体の活動が円滑に進むよう制度等を整備する方法、特に、学術団体に対する課税及び学術団体への寄付者への課税を緩和する方策が効果的と考えられる。

終わりに、この調査に御協力を頂いた学術団体の担当者の方々に深く感謝申し上げる次第です。

第16期日本学術会議会員のための 登録学術研究団体の概況

日本学術会議では、現在、第16期(平成6年7月22日～平成9年7月21日)会員(定員210人)選出のための手続が進められていますが、その第1段階として、昨年(平成5年)5月末日を締切期限として、学術研究団体からの登録申請の受付が行われました。これらの登録申請については、日本学術会議会員推薦管理会において審査が行われましたが、その結果は次のとおりでした。

- ・ 申請団体数……………1110団体
- ・ 登録団体数……………1069団体

「日本学術会議だより」について御意見、お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(3403)6291

国際細胞分化学会、第8回国際会議
共催「第4回広島がんセミナー」

- 会議名
和文名: 国際細胞分化学会、第8回国際会議
英文名: The Eighth International Conference of the International Society of Differentiation (ISD)
- 主催
国際細胞分化学会、第8回国際会議組織委員会
(組織委員長 田原 英一 広島大学医学部病理学第一講座)
財団法人広島がんセミナー
- 会期
1994年(平成6年)10月22日(土)~26日(水)、5日間
- 会場
広島国際会議場(広島市)
- 一般演題募集締切り
1994年(平成6年)5月31日
- 参加申込/問合せ先
国際細胞分化学会、第8回国際会議 事務局
〒107 東京都港区赤坂1-8-10 第9興和ビル
㈱サイマル・インターナショナル 国際会議・イベント部内
電話: 03-3586-8691 FAX: 03-3586-4531
- 参加費

一般	45,000円
ISD会員	40,000円
学生	25,000円
同業者	20,000円

Fourth Hiroshima Cancer Seminar "Gene Therapy of Cancer"

Opening and Welcoming Remarks

Takashi Sugimura, National Cancer Center, Tokyo, Japan

Symposium

Genetic therapy of leukemia and cancer

Albert B. Delisseroth, University of Texas, Texas, U.S.A.

Applications of gene therapy for cancer and immune deficiency
Michael Blaese, National Cancer Institute, Maryland, U.S.A.

New approach for therapy of UV-induced DNA damage
Margaret L. Kripke, University of Texas, Texas, U.S.A.

Genetically engineered toxins: New therapeutic agents for cancer
Ira Pastan, National Cancer Institute, Maryland, U.S.A.

Molecular neurosurgery of brain tumor based on cytokine gene therapy
Jun Yoshida, Nagoya University, Nagoya, Japan

Tumor vaccines expressing BRM-related genes
Hirofumi Hamada, Japanese Foundation for Cancer Research, Tokyo, Japan

Panel Discussion

Gene Therapy of Cancer—Scientific Validity, Bioethics, and Practical Problem—

Chairpersons:
Isaiah J. Fidler, University of Texas, Texas, U.S.A.
Fumimaro Takaku, International Medical Center of Japan, Tokyo, Japan

Scientific Program

Presidential Address

The cellular basis of tumor progression

Gloria H. Heppner, Michigan Cancer Foundation, Michigan, U.S.A.

Jean Brachet Memorial Lecture

Molecular background of cell contact and assembly
Masatoshi Takeichi, Kyoto University, Kyoto, Japan

Plenary Lectures

Differential transcription and lymphoid differentiation

David Baltimore, The Rockefeller University, New York, U.S.A.

Creation of mice with targeted disruptions in proto-oncogenes and homeobox genes
Mario R. Capecchi, University of Utah, Utah, U.S.A.

Embryonic neural chimeras in the study of brain development
Nicole Le Douarin, Centre National de la Recherche Scientifique et du Collège de France, Nogent-sur-Marne, France

Embryonic induction of mesoderm and neural tissue
Douglas A. Melton, Harvard University, Massachusetts, U.S.A.

Critical determinants of cancer metastasis
Isaiah J. Fidler, University of Texas, Texas, U.S.A.

Clinical applications of differentiation therapy
Wuun Ki Hong, University of Texas, Texas, U.S.A.

Symposia

1. *Transcription Factors as Oncoproteins*

Chair: David Baltimore, The Rockefeller University, New York, U.S.A.
Yoshiaki Ito, Kyoto University, Kyoto, Japan

2. *Tumor Suppressor Genes as Regulators of Cell Growth and Differentiation*

Chair: Eric J. Stanbridge, University of California, Irvine, California, U.S.A.
Tetsu Akiyama, Osaka University, Osaka, Japan

3. *Paracrine Growth Factor*

Chair: Stuart A. Aaronson, The Mount Sinai Hospital, New York, U.S.A.
Toshio Kuroki, The University of Tokyo, Tokyo, Japan

4. *Cytoskeleton in Cell Adhesion and Morphogenesis*

Chair: Werner W. Franke, German Cancer Research Center, Heidelberg, Germany
Shoichiro Tsukita, National Institute for Physiological Sciences, Okazaki, Japan

5. *Chromosome Inactivation and Imprinting in Development*

Chair: Azim Surani, Wellcome/CRC Institute, Cambridge, U.K.
Takashi Muramatsu, Nagoya University, Nagoya, Japan

6. *Genetic Regulatory Systems of Plant Morphogenesis*

Chair: Zsuzsanna Schwarz-Sommer, Max-Planck Institut für Züchtungsforschung, Köln, Germany
Kiyotaka Okada, National Institute for Basic Biology, Okazaki, Japan

7. *Molecular Neuro-Developmental Biology Including Homeotic Genes*

Chair: Peter Gruss, Max Planck Institute of Biophysical Chemistry, Göttingen, Germany
Hajime Fujisawa, Nagoya University, Nagoya, Japan

8. *Hematopoietic Stem Cells*

Chair: Thomas Graf, European Molecular Biology Laboratory, Heidelberg, Germany
Yukihiko Kitamura, Osaka University, Osaka, Japan

9. *Signaling Mechanisms of Embryonic Induction*

Chair: Siegfried W. de Laat, Hubrecht Laboratory, Utrecht, Netherlands
Makoto Asashima, The University of Tokyo, Tokyo, Japan

10. *Multisteps of Invasion-Metastasis*

Chair: David Tarin, University of Oxford, Oxford, U.K.
Tatsuro Irimura, The University of Tokyo, Tokyo, Japan

11. *Molecular Mechanisms of Cell Cycle Regulation*

Chair: Paul Nurse, University of Oxford, Oxford, U.K.
Takeharu Nishimoto, Kyushu University, Fukuoka, Japan

12. *Regeneration Studies Revisited*

Chair: Jeremy Brockes, Ludwig Institute for Cancer Research, London, U.K.
Kiyokazu Agata, Himeji Institute of Technology, Hyogo, Japan

13. *Carcinogenesis: Understanding Cancer as a Genetic Disease*

Chair: Curtis C. Harris, National Cancer Institute, Maryland, U.S.A.
Masaaki Terada, National Cancer Center Research Institute, Tokyo, Japan

14. *A Role of Apoptosis in Development and Differentiation*

Chair: H. Robert Horvitz, Massachusetts Institute of Technology, Massachusetts, U.S.A.
Shigekazu Nagata, Osaka Bioscience Institute, Osaka, Japan

15. *Nuclear Receptors in Morphogenesis*

Chair: Ronald M. Evans, The Salk Institute, California, U.S.A.
Hiroyuki Ide, Tohoku University, Sendai, Japan

16. *Normal Differentiation and Neoplasia in Amphibia*

Chair: Robert G. McKinnell, University of Minnesota, Minnesota, U.S.A.
Minoru Amano, Hiroshima Institute of Technology, Hiroshima, Japan

17. *Differentiation Therapy*

Chair: Robert E. Scott, The University of Tennessee, Tennessee, U.S.A.
Masaki Saito, Jichi Medical School, Tochigi, Japan

18. *Signal Transduction from the Cell Surface to the Nucleus*

Chair: Tony Hunter, The Salk Institute, California, U.S.A.
Eisuke Nishida, Kyoto University, Kyoto, Japan

Free Paper Presentations

The latest research and work can be presented in oral or poster sessions at the conference, based on the following topics:

- 1 Tumor Suppressor Gene
- 2 Growth Factor
- 3 Embryonic Induction
- 4 Signal Transduction
- 5 Gene Therapy
- 6 Gene Targeting
- 7 Regeneration
- 8 Retinoids
- 9 Plant Development and Morphogenesis
- 10 Transcription Factor
- 11 Genetic Imprinting
- 12 Cell Adhesion
- 13 Homeotic Gene
- 14 Hematopoiesis
- 15 Neuro-Developmental Biology
- 16 Differentiation Therapy
- 17 Cell Cycle Regulating Gene
- 18 Cell Death
- 19 Sex Determination
- 20 Plant Tumour
- 21 Intracellular Localization and Transportation
- 22 Carcinogenesis
- 23 Senescence
- 24 Cytoskeleton
- 25 Invasion-Metastasis
- 26 Extracellular Matrix and Morphogenesis
- 27 Extracellular Matrix and Metastasis
- 28 Stress Proteins in Cellular Differentiation
- 29 DNA Dynamism in Cellular Differentiation
- 30 Chromatin: Structural Basis for Gene Regulation

会 員 異 動

<新入会員>

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ, ②材料)
米元 純三	国立環境研究所	〒305 つくば市小野川16-2	①環境化学物質の発生毒性 ②ラット胎仔
加藤 和人	生命誌研究館	〒569 高槻市紫町1-1	①生命誌
石橋 誠	京都大学大学院医学研究科生体構造医学講座	〒606 京都市左京区吉田近衛町	①神経発生 ②マウス, ラット
斉藤 修	東京都神経科学総合研究所神経生化学	〒183 府中市武蔵台2-6	①プラナリアの脳神経系の分子生物学的解析とその神経細胞の分化機構 ②プラナリア
西川 慶子	神奈川歯科大学生理学教室	〒238 横須賀市稲岡町82	①てんかん関連遺伝子の分子生物学的解析 ②マウス
村上 昭	京都大学ウイルス研究所	〒606-01 京都市左京区聖護院河原町	①胚における Fgf-3 遺伝子の発現調節 ②マウス, Embryonal carcinoma cells
佐々木裕之	九州大学遺伝情報実験施設	〒812 福岡市東区馬出3-1-1	①マウスの発生遺伝学・インプリンティングの分子機構 ②マウス
井上 邦夫	京都大学理学部生物物理学教室	〒606-01 京都市左京区北白川追分町	①ショウジョウバエの性決定, ツメガエルの胚発生 ②ショウジョウバエ, ツメガエル
対木 尚	シオノギ製薬(株)新薬研究所	〒561 豊中市二葉町3-1-1	①器官形成期における哺乳動物の発生 ②ラット, マウス
田上 貴寛	農林水産省畜産試験場	〒305 茨城県稲敷郡茎崎町池の台2	①ニワトリへの遺伝子導入 ②ニワトリ
有賀 純	理化学研究所ライフサイエンス筑波研究センター分子神経生物学研究室	〒305 つくば市高野台3-1-1	①神経系の発生分化

帯刀 章子	帝京大学薬学部	〒199-01 神奈川県津久井郡 相模湖町	①レチノイン酸による表皮 粘液化生誘導機構について ②鶏胚皮膚
櫻井 通陽	農林水産省家畜衛生試験場分子免疫学研究室	〒305 つくば市観音台3-1-1	①トランスジェニックニワトリ作成 ②ニワトリ
阿部 道生	東京都立大学理学部生物	〒192-03 八王子市南大沢1-1	①ウニ胚初期発生における細胞骨格系の動態解析 ②ウニ
加納 安彦	名古屋大学環境医学研究所分子細胞適応発生遺伝分野	〒464-01 名古屋市千種区 不老町	①動物神経系の発生・分化・形態形成 ②マウス, ラット
影山龍一郎	京都大学医学部生体情報科学講座	〒606 京都市左京区吉田 近衛町	①哺乳動物の神経分化の分子生物学的解析 ②哺乳類
三枝 弘尚	財神奈川科学技術アカデミー「生体シグナル伝達」プロジェクト	〒250 小田原市成田540 明治乳業ライフサイエンス研究所内	①動物の形態形成 ②マウス
稲松 睦	新技術事業団吉里再生機構プロジェクト	〒724 東広島市西条町御菌宇 242-37 広島テクノプラザ内	①毛の誘導 ②ラット
倉谷 滋	熊本大学医学部附属遺伝発生医学研究施設形態発生部門	〒860 熊本市本荘2-2-1	①脊椎動物頭部の発生学・形態学 ②ニワトリ胚
立野 知世	新技術事業団吉里再生機構プロジェクト	〒724 東広島市西条町御菌宇 242-37 広島テクノプラザ内	①肝細胞の増殖, 肝臓の再生 ②ラット
國貞 隆弘	京都大学医学部分子遺伝	〒606-01 京都市左京区聖護院 川原町53	①神経堤細胞, 色素細胞の分化
古関 明彦	千葉大学医学部高次機能制御研究センター免疫	〒280 千葉市中央区亥鼻 1-8-1	①A role of axial structures upon somite differentiation ②ラット, ニワトリ
瀧原 義宏	大阪大学微生物病研究所遺伝子疾患研究分野	〒565 吹田市山田丘3-1	①F9細胞の細胞増殖と分化の調節因子の研究
浜田 義雄	基礎生物学研究所	〒444 岡崎市明大寺町西郷中 38	①哺乳類の発生分化 ②哺乳類

福田 淳	大阪大学医学部第二生理学教室	〒565 吹田市山田丘2-2	①視神経再生, 網膜神経節細胞の分化 ②ネコ, ラット, ハムスター
吉岡 秀文	徳島大学工学部生物工学科	〒770 徳島市南常三島町	①細胞増殖因子の初期発生における役割
木村 稔	東海大学医学部分子生命科学	〒259-11 伊勢原市望星台	①遺伝子発現と発生, 分化の関わり, および病気との関係 ②メダカ, マウス
城石 俊彦	国立遺伝学研究所遺伝実験生物保存研究センター	〒411 三島市谷田1111	①四肢の形態形成 ②マウス
城 忠志	大阪大学微生物病研究所	〒565 吹田市山田丘3-1	①哺乳類の初期発生分化のメカニズム ②F9, P19, OC15などのマウス胚性腫瘍細胞
岡本 裕之	水産庁養殖研究所	〒519-04 三重県度会郡玉城町 昼田224-1	①体軸形成に関わる遺伝子の発現 ②メダカ, アマゴ
小林 幸正	埼玉医科大学生物学教室	〒350-04 埼玉県入間郡毛呂山町川角981	①鱗翅類昆虫の比較発生学
西山 宣昭	福岡教育大学化学教室	〒811-41 宗像市大字赤間729	①分裂の空間パターン ②植物
阿部 訓也	熊本大学医学部附属遺伝発生医学研究施設	〒862 熊本市九品寺4-24-1	①哺乳類発生遺伝学 ②哺乳類
井口 智文	宇都宮大学教育学部生物化学教室	〒321 宇都宮市峰町350	①無尾両生類の胃部域に存在する酸性プロテアーゼについての精製と同定 ②ウシガエル, アフリカツメガエル
(学)水野 伸彦	総合研究大学院大学生命科学研究科基生研形態形成	〒444 岡崎市明大寺町 字西郷中38	①イモリの再生 ②イモリ
(学)堤 陽子	京都府立医科大学第二病理学教室	〒602 京都市上京区河原町通 広小路上ル梶井町465	①神経系の発生・分化 ②ニワトリ
(学)久保田幸彦	大阪大学教養部生物学教室	〒560 豊中市待兼山町1-1	①マウス神経冠細胞の発生過程における分化決定機構の解析 ②マウス

(学)米井小百合	東北大学理学部生物学 教室	〒980 仙台市青葉区荒巻 字青葉	①ニワトリ胚肢芽の形態形成 ②ニワトリ
(学)北村 茜	大阪大学細胞生体工学 センター	〒565 吹田市山田丘1-3	①初期発生過程における H-myc 遺伝子の機能解析 ②マウスとES細胞
(学)山村真由美	名古屋大学理学部分子 生物学科	〒464-01 名古屋市千種区 不老町	①アカハライモリの水晶体 再生過程に及ぼす発ガン 剤($\alpha\text{Ni}_3\text{S}_2$)の影響 ②アカハライモリ
(学)斎藤 朗子	山形大学理学部生物学 教室	〒990 山形市小白川町1-4-12	①アカハライモリ卵卵膜形 成の解析 ②アカハライモリ
(学)佐々木隆行	山形大学理学部生物学 教室	〒990 山形市小白川町1-4-12	
(学)鈴木 康弘	山形大学理学部生物学 教室	〒990 山形市小白川町1-4-12	①細胞培養下における精子 形成 ②メダカ
(学)中居 聖	山形大学理学部生物学 教室	〒990 山形市小白川町1-4-12	①アカハライモリの卵膜完 成機構の解析 ②アカハライモリ
(学)安西 弘子	理化学研究所分子腫瘍 学研究室	〒305 つくば市高野台3-1-1	①造血系の初期発生 ②マウス
(学)吉田 章子	京都大学理学部動物学 教室	〒606-01 京都市左京区北白川 追分町	①ホヤの発生生物学 ②ホヤ
(学)伊藤 寿朗	基礎生物学研究所遺伝 子発現統御第一部門	〒444 岡崎市明大寺町 字西郷中38	①シロイヌナズナによる形 態形成過程の分子遺伝学 ②イロイヌナズナ
(学)出口 竜作	東北大学理学部附属臨 海実験所	〒039-34 青森市大字浅虫 字坂本 9	①卵成熟。受精の際の卵内 イオン濃度変化の解析 ②主に二枚貝
(学)森部 弘樹	名古屋大学大学院理学 研究科分子生物学	〒464-01 名古屋市千種区 不老町	①マウス $\delta\text{EF}1$ の発現パ ターンと機能解析 ②マウス
(学)國枝 武和	東京大学薬学部微生物 薬品化学教室	〒113 文京区本郷7-3-1	①再生(分化, 脱分化の間 題を含む) ②センチニクバエ

学 浜名 洋	群馬大学工学部生物化学工学科	〒376 桐生市天神町1-5-1	①熱ショックタンパク質 (ブラナリア)
学 鈴木 浩文	東邦大学理学部生物学教室	〒274 船橋市三山2-2-1	①受精と初期発生 ②節足動物
学 吉本由喜子	大阪大学医学部生理学第二講座	〒565 吹田市山田丘2-2	①発生生理学 ②トリ胚
学 坂本 信之	東京都立大学理学部生物学科発生	〒192-03 八王子市南大沢1-1	①脊椎動物の遺伝子発現制御機構 ②ニワトリ
学 高木 豪	大阪大学細胞生体工学センター形態形成分野	〒565 吹田市山田丘1-3	①転写制御因子と形態形成 ②マウス
学 大竹 樹	神奈川大学理学部応用生物科	〒259-12 平塚市土屋2946	①発生生化学 ②ウニ
学 仲里 悟	名古屋大学理学部分子生物学科	〒464-01 名古屋市千種区不老町	①ニワトリ胚を用いたHox遺伝子の機能解析 ②ニワトリ, ウズラ
学 荻野 肇	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス科分子発生生物学講座	〒630-01 生駒市高山町8916-5	①ニワトリの α A-クリスタリン遺伝子の水晶体特異的な発現制御機構の解析 ②ニワトリ
学 澤本 和延	東京大学医科学研究所化学研究部	〒108 港区白金台4-6-1	①分子遺伝学的手法を用いた神経系の発生と分化の解析 ②キイロショウジョウバエ
学 ILIC Dusko	東京大学医科学研究所制癌研究室	〒108 港区白金台4-6-1	①ES細胞を用いたジーンターゲットィング
学 川又 尚	帝京大学薬学部生理化学	〒199-01 神奈川県津久井郡相模湖町	①表皮細胞の分化転換機構 ②ニワトリ
学 岸本 康之	総合研究大学院大学生命科学研究科遺伝学専攻	〒411 三島市谷田1111	①形態形成とその分子機構 ②ヒドラ
学 光村 直洋	生理学研究所高次神経機構部門	〒444 岡崎市明大寺町字西郷中38	①fyn (チロシンキナーゼ)の機構の解析
学 中島 敏	岡山大学理学部附属臨海実験所	〒701-43 岡山県邑久郡牛窓町鹿忍130-17	①イトマキヒトデにおける原腸形成機構 ②イトマキヒトデ

学新垣 宏	鹿児島大学理学部生物	〒890 鹿児島市郡元1-21-35	①イモリ卵における背側形成能に関する問題 ②イモリ
学真崎 雄一	基礎生物学研究所形態形成研究部門	〒444 岡崎市明大寺町字西郷中38	①再生時におけるECMの役割 ②ニワトリ
学宮川 照美	名古屋大学理学部分子生物学科第五講座	〒464-01 名古屋市千種区不老町	①中枢神経(CNS)の発生とその部域化に関する研究 ②ゼブラフィッシュ
学蓬田健太郎	東北大学医学部第二医化学	〒980 仙台市青葉区星陵町2-1	①生殖細胞の分化 ②マウス, ラット, ヒト
学影山 裕二	総合研究大学院大学生命科学研究科遺伝学専攻	〒411 三島市谷田1111	①昆虫の変態時における遺伝子の転写制御機構 ②キイロショウジョウバエ
学布施 直之	総合研究大学院大学生命科学研究科遺伝学専攻	〒411 三島市谷田1111	①転写因子の発生過程における役割 ②ショウジョウバエ
学岡部 正隆	東京大学医科学研究所化学研究部	〒108 港区白金台4-6-1	①分泌性タンパク質をコードするstrawberry遺伝子の機能解析 ②ショウジョウバエ
学小嶋 康成	東京理科大学理工学部応用生物科学科恒松研究室	〒278 野田市山崎2641	①ニワトリ胚神経性網膜の発生・分化：層形成期に特異的に発現するmRNA分子種の単離 ②ニワトリ
学野村みどり	大阪大学微生物病研究所遺伝子疾患研究分野	〒565 吹田市山田丘3-1	①哺乳動物の初期分化機構の研究 ②F9細胞
学榊屋 啓志	国立遺伝学研究所細胞遺伝	〒411 三島市谷田1111	①マウス四肢形成の遺伝学的解析 ②マウス
学田中 良	甲南大学理学部生物学教室	〒658 神戸市東灘区岡本8-9-1	①ホヤの分子生物学 ②ホヤ
学和田 倫子	甲南大学理学部生物学教室	〒658 神戸市東灘区岡本8-9-1	①ホヤの分子生物学 ②ホヤ

- (学)黒石くみ子 静岡大学教養部生物学 〒422 静岡市大谷836 ①ウニ卵細胞質中での中心体形成機構について
②ウニ
- (学)長曾 秀幸 北海道大学薬学部 〒060 札幌市北区北12条西6丁目 ①ゼブラフィッシュの初期発生
②ゼブラフィッシュ
- (学)鯉淵 信孝 北海道大学理学部生物科学学科 〒060 札幌市北区北10条西8丁目
- (学)林 尚徳 筑波大学大学院農学研究科農林学専攻 〒305 つくば市天王台1-1-1 ①ニワトリ始原生殖細胞(PGC)の研究
②ニワトリ
- (学)中川 真一 京都大学理学部生物物理学教室竹市研究室 〒606 京都市左京区北白川追分町
- (学)井上 高良 京都大学理学部生物物理学教室 〒606-01 京都市左京区北白川追分町 ①動物の形態形成と細胞接着
②マウス
- (学)松原 信行 東北大学加齢医学研究所分子発生 〒980 仙台市青葉区星陵町4-1 ①マウス始原生殖細胞の増殖と分化の制御
②マウス, 始原生殖細胞
- (学)細谷 俊彦 東京大学理学系研究科物理学専攻堀田研究室 〒113 文京区本郷7-3-1 ①中枢神経系形成に関与する遺伝子の同定と解析
②ショウジョウバエ

<住所・所属変更>

(氏 名)	(所 属)	(住 所)
高木 知道		〒239 横須賀市津久井222
増田 明徳		〒346 久喜市青葉2-9 県営久喜青葉団地4棟108
武田 洋幸	名古屋大学理学部分子生物学科第五講座	〒464-01 名古屋市千種区不老町
北川 泰雄	名古屋大学生物分子応答研究センター	〒464-01 名古屋市千種区不老町
吉木 淳	理化学研究所ライフサイエンスセンター真核生物研究室	〒305 つくば市高野台3-1-1
入江美代子		〒279 浦安市舞浜3-5-11
米田 満樹		〒203 東久留米市滝山5-7-7
弥益 恭	埼玉大学理学部生体制御	〒338 浦和市下大久保255
平田たつみ	名古屋大学理学部分子生物学科	〒464 名古屋市千種区不老町

香川 務	国立療養所翠ヶ丘病院	〒970-02 いわき市平豊間兔渡路291
久保 俊之	上智大学生命科学研究所	〒102 千代田区紀尾井町7-1
坂倉 照好	三重大学医学部病理学教室	〒514 津市江戸橋2-174
村松 喬	名古屋大学医学部第一生化学	〒466 名古屋市昭和区鶴舞町65
山田 可水	朝日大学歯学部生物学教室	〒501-02 岐阜県本巣郡穂積町大字穂積 1851-1
坂口 雅彦	信州大学教育学部生物学教室	〒380 長野市西長野町
三浦 直行	秋田大学医学部生化学第一	〒010 秋田市本道1-1-1
西川 伸一	京都大学医学部分子遺伝学教室	〒606-01 京都市左京区聖護院川原町53
松崎 貴	吉里再生機構プロジェクト	〒724 東広島市西条町御園宇242-37 広島テクノプラザ内
山岸 敏之	埼玉医科大学第二解剖	〒350-04 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂 本郷38
近藤 玄	大阪大学遺伝情報実験施設	〒565 吹田市山田丘3-1
小谷 穰一		〒591 堺市新金岡町4丁3-11-108
民谷 栄一	北陸先端科学技術大学院大学材料 科学研究科機能科学専攻	〒923-12 石川県能美郡辰口町旭台15
河原 明	広島大学総合科学部物質生命コース	〒724 東広島市鏡山1-7-1
仲村 春和	東北大学加齢医学研究所分子神経 研究分野	〒980 仙台市青葉区星陵町4-1
佐竹 正延	東北大学加齢医学研究所免疫遺伝子 制御	〒980 仙台市青葉区星陵町4-1
小阪美津子	基礎生物学研究所形態形成研究部門	〒444 岡崎市明大寺町字西郷中38
橋戸 和夫	国立予防衛生研究所放射能管理室	〒162 新宿区戸山1-23-1
岩間 久行	都職清瀬病院	〒204 清瀬市竹丘3-10-5
小清水右一	国立遺伝学研究所発生工学研究室	〒411 三島市谷田1111
(学)西條 幸男	(財)東京都臨床医学総合研究所化学 療法部	〒113 文京区本駒込3-18-22
(学)野村 彰	お茶の水女子大学館山臨海実験所	〒294-03 館山市香・海の星
(学)舟橋 淳一	東北大学加齢医学研究所分子神経 研究分野	〒980 仙台市青葉区星陵町4-1
(学)板崎 伸栄	東北大学加齢医学研究所分子神経 研究分野	〒980 仙台市青葉区星陵町4-1
(学)吉田 尚弘	京都大学医学部分子遺伝学教室	〒606-01 京都市左京区聖護院川原町53
(学)金井(東)正美	(財)東京都臨床医学総合研究所超微 形態研究部門	〒113 文京区本駒込3-18-22

<退 会>

天沼 昭
岩崎 尚彦
岩沢 久彰
岡田 善雄
桂 茂
高橋 裕哉
山名 清隆
吉田 博一
和田 薫
宇野賀津子
平光 厲司
柴谷 篤弘
西脇 清二
松元 隆夫
谷口 實
平林 保治
河合 武
今田 勝
鈴木 純子
宇都宮弘美
池松 真也
今井 勝俊
藤井 孝朗
浜崎 正雄
宮村 毅
(学)山田 一哉
(学)照井 雅巳
(学)田島 陽一
(学)真鍋 純一
(学)小林 弘毅
(学)村田 武英

Gerhard Czihak

Shigetoshi Mori

Yutaka Sakai

(受付順)

〔賛助会員〕

- | | | |
|-------------------------|-------|-------------------------------------|
| 生物学・生態学洋書のことならグリーン洋書(株) | 〒 210 | 川崎市幸区塚越 2-260
TEL 044-533-0470 |
| 生命誌研究館 | 〒 569 | 高槻市紫町 1-1
TEL 0726-81-9750 |
| 三菱化成生命科学研究所 | 〒 194 | 町田市南大谷11
TEL 0427-24-6226 |
| 明治乳業(株)ヘルスサイエンス研究所 | 〒 250 | 小田原市成田540
TEL 0465-37-3661 |
| 試薬及び理化学機器販売の理科研(株) | 〒 463 | 名古屋市守山区元郷 2-107
TEL 052-798-6151 |
| 科学の技術に奉仕する理工学社 | 〒 113 | 文京区本駒込 5-9-10
TEL 03-3928-5211 |
| 次代を担うバイオテクノロジー和研薬(株) | 〒 606 | 京都市左京区北白川西伊織町25
TEL 075-721-0491 |

(50音順)

賛助会員へのご入会のお願い

日本発生生物学会

会長 江口 吾朗

近年、ライフサイエンス、バイオテクノロジー等の言葉が広く語られ、生物学に大きな関心と注目が払われるようになってまいりました。

日本発生生物学会は、発生生物学の進歩と普及をはかるため設立された学会で、日本を主に、外国の発生学者を混じえて約1,000名を結集しております。発生学は、言うまでもなく医学・農学等の諸分野とも深い関連を有しており、最近とみに進展の著しい遺伝情報発現をめぐる諸問題、癌細胞の基礎的研究、老化の問題等も発生生物学の大きな関心の的になっております。日本発生生物学会は、これらの分野での活発な研究者を会員としております。又、本学会の刊行致しております欧文誌“Development, Growth and Differentiation”(DGD)もこの方面の国際的学術雑誌として高く評価されております。

貴社におかれましては、このような学問の重要性をすでに御承知のことと存じます。何卒、本学会趣旨に御賛同の上、賛助会員として本会を御支援賜りますようお願い申し上げます。

なお、賛助会員は年3回発行される「インフォメーション・サーキュラー」誌上に特記され、本会の刊行する欧・和文刊行物(会員名簿を含む)が配布されます。会費は、一口三万円を申し受けております。御入会の際は、入会申込書を事務局までお送り下さい。

連絡先：日本発生生物学会事務局

〒444 岡崎市明大寺町西郷中38

基礎生物学研究所 生殖研究部門内

日本発生生物学会

TEL(0564)55-7550 FAX(0564)55-7556

-----切-----り-----取-----り-----線-----

日本発生生物学会賛助会員入会申込書

年 月 日

賛助会員として入会の申し込みを致します。

(口 円)

住 所

会 社 名

担当者名

電話番号

印

広告掲載のお願い

日本発生生物学会は理学、医学、薬学、農学をはじめ分子生物学、細胞生物学、遺伝学など、さまざまな生物学分野で発生生物学の基礎研究に興味を持つ内外の研究者によって組織されている学会であり、国内外に約1,000人の会員を持っております。

英文学術雑誌 Development, Growth and Differentiation は、日本発生生物学会の機関誌で年6回発行し、国内に約1,000部、国外に約600部配布致しております。また会員にはインフォメーション・サーキュラーを年3回配布致しております。

目下、本学会では広告主を募っております。会員各位におかれましても広告主のご紹介等、是非ご協力頂きますようお願い致します。

広 告 料			
D G D 本誌	1 頁	年 6 回	150,000円
	半 頁	〃	78,000円
インフォメーション サーキュラー	1 頁	年 3 回	30,000円
	半 頁	〃	15,000円

申し込み先：日本発生生物学会事務局

〒444 岡崎市明大寺町西郷中38

基礎生物学研究所 生殖研究部門内

日 本 発 生 生 物 学 会

TEL(0564)55-7550 FAX(0564)55-7556

----- 切 り 取 り 線 -----

広告申し込み書

年 月 日

日本発生生物学会 御中

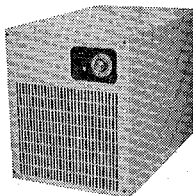
広告の掲載をお願いしたく下記の通り申し込みます。

☐ D G D 本誌	1 頁
☐ 〃	半 頁
☐ サーキュラー	1 頁
☐ 〃	半 頁
住 所	
会 社 名	
担当者名	
電話番号	

加熱冷却ユニット

クーラー・ヒーターはチタン製。淡水はもちろん海水や薬品液にも使用できる高性能の循環式小型加熱冷却装置です。

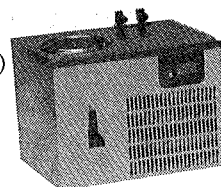
形式	クーラー	ヒーター	概略水量	価格
HC061A-3	65W	300W	120ℓ	¥213,000
HC101A-3	100W	300W	160ℓ	¥225,000
HC131A-5	130W	500W	260ℓ	¥239,000
HC201A-5	200W	500W	360ℓ	¥258,000
HC301A-5	300W	500W	670ℓ	¥321,000
HC401A-5	400W	500W	1000ℓ	¥360,000



低温恒温循環水槽

実験台上でも使用できるように極めてコンパクトにまとめた低温恒温循環水槽です。水温は低温から高温までを任意に設定することができます。外部循環機能をそなえておりますので恒温水槽のほか、カラムの冷却、保温など幅広い用途があります。

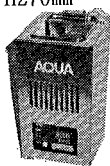
形式:CT 65-300-S
使用温度範囲:0~50℃(±0.1℃)
外形寸法:W420×D330×H340mm
槽内寸法:φ153×H187mm
冷凍機:65W ヒーター:300W
価格:¥250,000



超小型ウォーターバス式インキュベーター

極めてコンパクトにまとめた超小型の恒温槽です。50ml程度のピーカーや小型の試験管数本の恒温を得る用途に適しています。

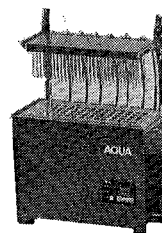
形式:CTH-100(加熱専用型)/CTC-100(加熱冷却型)
外形寸法:146×176×h225mm/146×176×h270mm
温度範囲:室温+5~60℃/+5~60℃
温度精度:±0.05~±0.1℃
槽材質:ステンレス SUS304
槽内寸法:98×100×h59mm
本体価格:¥98,000/¥168,000



ゼットコンデンサー

空気または窒素ガスを試験管内に吹きつけ、溶媒の蒸発を促進し、濃縮時間を短縮する装置です。

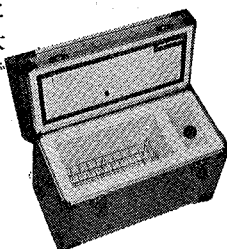
形式:JC 70-300
外形寸法:350×191×h540mm
槽内寸法:300×120×h70mm
温度範囲:室温~100℃±0.4deg
吹出ノズル本数:70本
ヒーター:300W
空気ポンプ:20W
電源:100V
価格:¥310,000



恒温コンテナ

蓄冷体の融解速度を微量にコントロールして恒温を保つ小型の恒温輸送用コンテナです。凍結したら困るあらゆる物体の低温での恒温輸送に威力を発揮します。商用電源、大型バッテリーを使用しないので可動性に富みどこでも使えます。

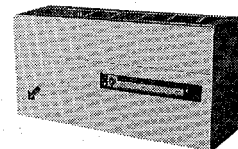
形式:CTC-422
外形寸法:407×193×H298mm
庫内寸法:246×122×H200mm
コントローラー:デジタル設定、デジタル表示
価格:¥88,900(蓄冷体-5℃付)



温度勾配装置(ウォーターバス)

温度調節水槽はそれぞれ独自の温度に設定できます。精度の高い恒温が得られます。温度の設定はデジタル式。振とう装置付きもあります。

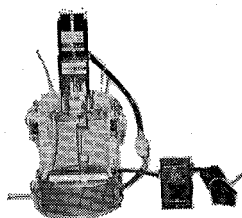
形式:TGW-3(三連)/TGW-5(五連)
使用温度範囲:0~50℃
温度調節精度:±0.05~±0.1℃
槽内寸法:150×260×150×3/×5
冷凍機:200W/300W
ヒーター:90W×3/×5
価格:¥788,000/¥970,000



本城式プランクトン濃縮装置

プランクトンを効率よく回収する装置です。プランクトン細胞の崩壊が少なく、低濃度で分布している種類を観察することができます。ろ過水はプランクトンの体液が混入しない純水なものが得られます。ろ紙の表面は目詰まりしにくく早い流速が得られます。

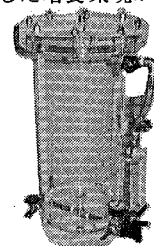
形式:PC15-S
回収率:80~95%
価格:¥98,000



加圧式インキュベーター

空気または不活性ガスで加圧した環境下で各種生物を培養する装置です。新鮮な空気を常に供給しながら一定圧を保つことができますので安定した培養環境が得られます。

形式:PI 203
最大使用圧力:2.5kg/cm²
内寸法:φ190×h440mm
外形寸法:φ280×h530mm
本体材質:透明アクリル
価格:¥198,000(加圧ポンプは別)
給水装置 減圧弁・安全弁付



生細胞の染色に

細胞蛍光標識キット

Cell Linker Technology に基づく細胞染色法で、細胞膜に高親和性を持つ新しいタイプの蛍光色素PKH2またはPKH26 蛍光色素と希釈液とを組み合わせた、細胞蛍光標識キットです。

細胞機能に影響しません

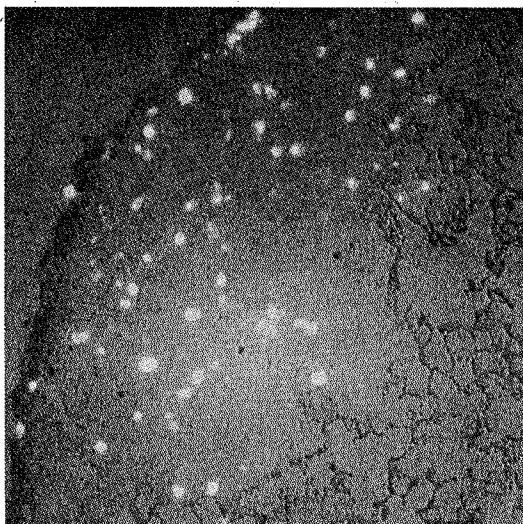
細胞と数分間混合するだけで、生細胞をその機能を損うことなく染色可能で、細胞の移動や増殖のモニタリングに大きな威力を発揮します。

簡便です

従来 ^{51}Cr 等を用いて行われていた LAK 細胞のモニタリングや NK 活性の測定が簡便に、しかも安全に行うことができます。

安定です

ウサギ赤血球を標識した場合、PKH26 では in vivo でその溶出の半減期が100日以上を示し、長期のモニタリングが可能です。



Tumor Localization of PKH26 Labeled TILs.

マウス肺癌組織に浸潤している、PKH26 で染色した IL-2 処理リンパ球が観察されます。

Photo Courtesy of
Drs. Per Basse & Ronald H. Goldfarb
Pittsburgh Cancer Institute, Pittsburgh, PA

発売元



大日本製薬株式会社
ラボラトリー プロダクツ部

〒564 大阪府吹田市市江の木町33-94
TEL 大阪 (06) 386-2164(代表)
東京 (03) 3828-6544(代表)

マウスのテラトーマ

—EC細胞による哺乳動物の実験発生学—

森脇和郎／序

野口武彦 村松 喬／編集

定価 3914 円(税込)A 5 判・296 頁・並製

テラトーマの生物学的な知識、EC細胞の種類と成立、EC細胞を用いた初期胚の細胞生物学・分子生物学的研究、EC細胞のキメラ動物への応用などについて、研究の進展を紹介し、その理論と実験技術を解説してあります。

哺乳動物の初期発生

—基礎理論と実験法—

妹尾左知丸 加藤淑裕 入谷 明

鈴木秋悦 館 郷／編集

定価 15450 円(税込)B 5 判・480 頁・上製

初期発生の基礎理論をはじめに説明し、ついで初期胚を研究対象とする主要な実験研究法を解説してあります。生命現象研究へ大きな手がかりとなる本書は、医学・生物学・農学・薬学を専攻する研究者の必携の書です。

体細胞遺伝学

山根 績 岡田善雄 堀川正克 黒木登志夫／編集

定価 10094 円(税込)A 5 判・720 頁・上製

HVJ による細胞融合法、薬物や放射線、化学物質を用いた細胞の突然変異による研究、あるいは遺伝子組換え法を使った研究等体細胞遺伝学研究の最前線をまとめたモノグラフィー。医学・生物学・農学・薬学研究に絶好の参考書です。

理工学社

東京都文京区本駒込5-9-10 電話 03(3828)5211(代) 振替口座番号 東京1-34676 〒113

MERCK 社製

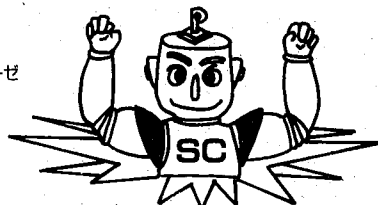
プロテアーゼ阻害剤

Pefabloc SC

化学名 4-(2-Aminoethyl)-benzenesulfonyl Fluoride・Hydrochloride

ベファブロックSC

ほとんどすべてのセリンプロテアーゼを迅速かつ効果的に阻害します。



PMSFや
DFPと比べて

低毒性 マウス: LD₅₀ 2800mg/kg

中性で安定 半減期(pH7.0, 22°C): 20時間

水に易溶 20g/100ml

Cat.No.	製品名	包装
24839-1M	Pefabloc SC ベファブロック SC	生化学用 (冷) 100mg

※詳細は下記までお問い合わせ下さい。

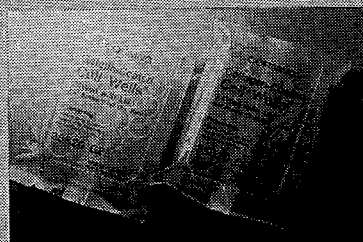


関東化学株式会社
試薬事業本部

本社/〒103 東京都中央区日本橋本町3-2-8 ☎03(3663)7631
大阪/〒541 大阪市中央区瓦町2-5-1 ☎06(222)2796
福岡/〒812 福岡市博多区山王1-1-32 博多堀池ビル ☎092(414)9361

CORNING BETTER SURFACE PRODUCTS

コーティングの時間と
コンタミネーションの不安を解消



■ファイブロネクチンコート製品

コードNo.	規 格	培養面積	個/パック	個/外面
25000FN	ディッシュ 35φ	9cm ²	10	60
25010FN	ディッシュ 60φ	21cm ²	10	40
25020FN	ディッシュ100φ	55cm ²	10	40

○ウシ血漿由来ファイブロネクチン

■コラーゲンコート製品

コードNo.	規 格	培養面積	個/パック	個/外面
25000COLI	ディッシュ 35φ	9cm ²	10	200
25010COLI	ディッシュ 60φ	21cm ²	10	200
25020COLI	ディッシュ100φ	55cm ²	10	120
25810COLI	マイクロプレート6F	9.4cm ²	1	20
25820COLI	マイクロプレート24F	2cm ²	1	20
25860COLI	マイクロプレート96F	0.32cm ²	1	20
25100COLI	フラスコ 25cm ²	25cm ²	10	60

○ブタ臍由来酸可溶性TypeIコラーゲン

■ゼラチンコート製品

コードNo.	規 格	培養面積	個/パック	個/外面
25000GEL	ディッシュ 35φ	9cm ²	10	200
25010GEL	ディッシュ 60φ	21cm ²	10	200
25020GEL	ディッシュ100φ	55cm ²	10	120
25810GEL	マイクロプレート6F	9.4cm ²	1	20
25820GEL	マイクロプレート24F	2cm ²	1	20
25860GEL	マイクロプレート96F	0.32cm ²	1	20
25100GEL	フラスコ 25cm ²	25cm ²	10	60

○豚皮由来ゼラチン

ご使用に先立ちサンプルによる事前チェックをおすすめします。35%ディッシュ、サンプルパックを用意しておりますのでご希望の方は本社又は下記支店へご連絡下さい。

岩城硝子株式会社

本社第3営業部 〒100 東京都千代田区丸の内3-2-3 ☎03(214)6221(直)
 ●大阪支店 ☎06(362)6291(代) ●名古屋支店 ☎052(211)3855(代)
 ●九州支店 ☎092(451)5606(代) ●広島支店 ☎082(248)0293(代)
 ●札幌営業所 ☎011(221)3477(代)